

Gary Snyder
“T-2 Tanker Blues”

作品論

学籍番号：1 2 3 4 5 6 7 8

氏名：原ゼミ 太郎

コメントの追加 [d1]: 16 行目が中心になるようにする。フォントは 16。タイトルは、何について論じているか、わかるようなタイトルをつけること。

ゲアリー・スナイダー(Gary Snyder, 1930-)の「T-2 タンカーブルース」(“T-2 Tanker Blues”)について論じる。この詩は 1957 年から 58 年にかけて、スナイダーがサップクリーク(Sappa Creek)という石油タンカーに乗船し、働いていた頃のことについて書かれたものである。タイトルにもなっている T-2 タンカー⁽¹⁾とはそのサップクリークを指す。

心は満たされる。写真、安い雑誌、どんちゃん騒ぎ、
つまらない本、海での日々で。仕組みと金への憎しみ。
自分の身体を金で売って、
この軍事用の燃料を運ぶために――

Mind swarming with pictures, cheap magazines, drunk
brawls, low books and days at sea; hatred of machinery
and money & whoring my hands and back to move
this military oil-- (*Riprap and Cold Mountain Poems* 29)⁽²⁾

第 1 スタンザ 4 行目まではまさしくサップクリークにおける「海での日々」“days at sea”を語ったものである。「仕組みと金」“machinery and money”とは、資本主義などの社会の仕組みのことであり、それに対して憎しみを持ちながらも、語り手自身も「自分の身体」“whoring my hands and back”全身を資本として労働しなければならない状況下にある。そして 5 行目から 7 行目にかけて夜が更け、語り手はその日の労働を終え、1 人甲板に座り星や月を見ながら物思いにふける。8 行目から、語り手はマルキ・ド・サド(Marquis de Sade, 1740-1814)⁽³⁾について、考えを巡らせる。

私は 1 日中、サドを読んでいた――私はあの男が嫌いだ――彼の難題に疑問を抱き、
心の中にソドミーと殺人を捜し求める――
世界を遊び心があり、格好良く、無限に見えないものとして見つけ出す――
サドと理性とキリスト教の愛。

All day I read de Sade--I loathe that man--wonder on his
challenge, seek sodomy & murder in my heart--& dig
the universe as playful, cool, and infinitely blank--
De Sade and Reason and the Christian Love.

「心の中にソドミーと殺人を捜し求める」“seek sodomy & murder in my heart”という表現から、サドの作品にあるような狂気的な面が自身の中にもあるのかどうか、捜している

コメントの追加 [d2]: 邦題は「」、英語題は 0 とダブルクォーテーションで囲む。

コメントの追加 [d3]: これは註、わかりにくい単語などを註で説明する。半角 0 に半角数字、上付きボタンで！7 ページ参照。

コメントの追加 [d4]: 3 行以上の詩の引用は前後に 1 行開けて。日本語訳を先に載せること。独立して引用をする時は、2.5(半角スペース 5 個分)インデント。

コメントの追加 [d5]: 詩集の題名、ページ数。本のタイトルはイタリックで書く。ちなみに長い題名は註を付けて、省略することを記載する。

コメントの追加 [d6]: ハイフンは繋げない。

のがわかる。そしてその答えが 10、11 行目である。人間の精神というものは「遊び心があり、格好良く、無限に見えないもの」“playful, cool, and infinitely blank”だということを知る。「サド」「De Sade」、「理性」「Reason」、「キリスト教の愛」「Christian Love」はそれぞれ相反するもの、対極にあるものであるが、人間はこれら全てを含んでいるのである。それこそ人間の心だといえるのかもしれない。

12 行目以降、この詩のキーワードといえるインヒューマニズムに迫っていく。場面は再び夜の船へと戻り、語り手がその景色を眺めている。

非人間的な海、黒い水平線、青白い月の光で満ちた空、

月、全知の真珠——古のシンボル、波、

海面に映った月——女神たちの名前、

月の表面のウサギ、神話、潮の流れ、

非人間的なアルタイル——あの「非人間的な」話。その目は知っている、

すべての空間はこの頭蓋骨にはめ込まれるということ。変形した。

太陽の熱の源は心だ、

私はインヒューマニズムを叫ぼうとはしないし、それが私たちを小さくして、

自然を大きくするとは思わない、私たちはそれで十分だ、私たちのままで——

目に見えない海鳥が私たちを追い、救済者が来て助けてくれる。

Inhuman ocean, black horizon, light blue moon filled sky,

the moon, a perfect wisdom pearl--old symbols, waves,

reflections of the moon--those names of goddesses,

that rabbit on it's face, the myths, the tides,

Inhuman Altair--that “inhuman” talk; the eye that sees

all space is socketed in this one human skull. Trans-

formed. The source of the sun's heat is the mind,

I will not cry Inhuman & think that makes us small and

nature great, we are, enough, and as we are--

Invisible seabirds track us, saviours come and save us. (RP 29)

「海面に映った月」「reflections of the moon」とあるが、『旅する場所』(A Place of Wayfaring)の著者、パトリック・D・マーフィ(Patrick D. Murphy)によると、「真如あるいは仏教的な感覚を示唆する」(61)。つまりこれは仏教における「真如の月」を表している。真如の月とは、あるがままであること、という真如によって煩惱の迷いが晴れることを指す。つまりここで語り手の悩みなどが晴れ、20 行目に「私たちはそれで十分だ、私

コメントの追加 [d7]: 本からの引用は「」で！
ページ数も忘れずに！

たちのままで”we are, enough, and as we are”とあるように、自分たちは自分たちのあ
るがままで良いという考えに至っている。対して「私はインヒューマニズムを叫ぼうとは
しないし、それが私たちが小さくして、**／自然を大きくするとは思わない**”I will not cry
Inhuman & think that makes us small and / nature great”(19-20)ということから、ロビ
ンソン・ジェファーズ(Robinson Jeffers 1887-1962)の『両刃の斧とその他の詩』(*The
Double Axe And Other Poems*)に定義されるインヒューマニズムを正しいとは、語り手は
考えていないとわかる。そのインヒューマニズムとは善や真理の根拠を、自然の中に見出
した概念である。それまでの人間中心的な概念から、人間ではないもの、非人間的なもの
を中心とした。以下の詩は三浦徳弘氏の訳詩集である『ロビンソン・ジェファーズ詩集』
に収められている、「巡礼への忠告」(“Advice to Pilgrims”)の一節である。

空虚なことを空虚な耳に喋らしておけばよい
2 回欺かれれば もう十分である
荒涼とした海辺を歩き 人間を避けるがよい 岩と波がよき預言者である
賢明なるはカモメの翼 快きはカモメの歌 (109)

人間を避け、岩や波、カモメといった自然を中心とするインヒューマニズムの思想が詩の
中にもはっきりと表現されている。しかしこういったインヒューマニズムを全て否定して
いるわけでもない。「目に見えない海鳥が私たちを追い、救済者が来て助けてくれる」
“Invisible seabirds track us, saviours come and save us”とは、つまり非人間的な自然が
導いてくれるというわけである。ただ、インヒューマニズムを優位に考えるわけではない。
人間も非人間もどちらが上か下かといったような、優劣を決めるのではなく、ありのまま
の状態が良いと述べているのではないだろうか。

第2スタンザはミッドウェー諸島のラグーンに停泊している場面から始まる。その砂浜
で、語り手はゲンカン鳥や亀の死骸を見るが、ペルシャ湾に向けて再び出航する。その際
に、沈むことなく海を渡れているのは、日本の仏像が船を後押ししてくれているおかげで
はないかと思いを馳せている。さらに第2スタンザ 11 行目では、前の晩の港での宴を思
い返す。

昨夜港で酔っ払った俺を罵ってくれ。そして、この駄作を罵ってくれ。
ハワイ人の労働者が大きな樽に入ったビールを分けてくれた。
けた網漁師や製鋼業者の女のいない宴と賭博場。
そして、私たちを見知らぬ船員「ブララ」と呼び、腕を組んで、
伝統的なハワイの歌を歌った、

コメントの追加 [d8]: 2 行にわたる引用は、全角
斜線で区切る。英語は半角斜線、ちなみに英語の
時は前後に半角スペース。

コメントの追加 [d9]: 有名な人の名前は英語名と
生没年を記載。例えば 1960-1990 まで生きた人の
場合は、(1960-90)と省略する。

コメントの追加 [d10]: ページ数。上に本のタイト
ルが書いてあるから、ここはページ数だけでよし。

Damn me a fool last night in port drunk on the floor & damn
this cheap trash we read. Hawaiian workers shared us
beer in the long wood dredgemen's steel-men's girl-less
night drunk and gambling hall, called us strange sea-
men *blala* and clasped our arms & sang real Hawaiian
songs, (RP 30)

「この駄作」“this cheap trash”とは、その後に「私たちが読む」“we read”とはっきりと書いてあることからわかるが、この「T-2 タンカーブルース」を指している。また、「ブララ」“*blala*”というのはハワイの言葉で「タフな男」という意味である。ここで筆者が面白いと感じたのは、この詩の宴は「女のいない」“girl-less”ものであるという点だ。同じ詩集『割り石と寒山詩』(*Riprap and Cold Mountain Poems*)の中に「カルタヘナ」(“Cartagena”)という作品がある。これはスナイダーが18歳のときに初めてカルタヘナに行った際の出来事を書いたものである。港に降りた男たちは皆、酒を飲み、女たちと過ごすのだ。「T-2 タンカーブルース」の男しかいない宴とは実に対照的であり、詩集の中でこの作品のすぐ後に「カルタヘナ」(“Cartagena”)が収められているというのも、一層この2つの詩の違いを感じとることができる。そしてさらにユーモアを感じられるのが、次の部分である。

ましな馬鹿をする俺を罵らないでくれ。人間、非人間的な人間より広大で、
美しく、よそよそしく、思慮のないものはない。
(波に映る永遠にバラ色の日の出——
岩の偉大な潔白さ)

Damn me not make a better fool. And there is nothing
vaster, more beautiful, remote, unthinking (eternal
rose-red sunrise on the surf-great rectitude of rocks)
than man, inhuman man,

それまでは2回「俺を罵ってくれ」“Damn me”と続いていたが、ここでは「俺を罵らないでくれ」“Damn me not”に変化する。括弧内の描写は「永遠」の美しさを説いているが、そういったものよりも、人間や非人間について考えている語り手のような、一生懸命に生きているものの方がより良いのではないか。「ましな馬鹿」“better fool”という表現に面白味と人間性を感じられる。

第2スタンザ 27 行目からは語り手の人生と、一般的な人生の変容性がうかがえる。何

年も前に妻、恋人が去り、車なども語り手の手元からなくなった。「精神と物質／愛と宇宙」
“Mind & matter, / love & space”(29-30)がビールの泡のようにもろいというのは、人と人生の移り変わりの儂い様子を例えたものであろう。32行目からは船へと視点が戻る。

炎がこの船の駆動軸を回転させる。駆動軸は潤滑油まみれで、
音を立てている——往年のやしの実の果汁——砂だらけの大地の甘い油——
完全な鋼の溶接された板に抱かれて。

Fire spins driveshaft of this ship, full of smooth oil &
noise--blood of the palms d'antan--sweet oil of the
gritty earth--embraced in welded plates of perfect
steel. (RP30)

33行目の“d'antan”とはフランス語で「往年の」という意味である。この3行のT-2タンカーの動く様子は非常にリアリティーに富んでいる。この作品の最後にT-2タンカーを描くことで、語り手が船に乗っていたからこそ、この詩にある人間性や非人間性について、また人生そのものについて考えたということがわかる。

この作品はスタンザが2つにしか分かれておらず、散文のようで、いくつかの行がほかの行に比べて突出しているのは、スナイダーと同世代のビート詩人であるアレン・ギンズバーグ(Allen Ginsberg, 1926-97)の「吠える」(“Howl”)の影響を強く受けているためであろう。そういった詩の形もそうであるが、この詩は読み手が考えれば考えるほど面白い作品になるのではないかと筆者は感じる。スナイダーの言う「ましな馬鹿」“better fool”を行う、つまり色々な物事について考えを巡らせ必死に生きる方が、より面白味のある人生を送れるのではないだろうか。

註

- (1) アメリカで第二次世界大戦中に大量生産された石油タンカー。
- (2) 以下 *Riprap and Cold Mountain Poems* を *RP* と省略して表記する。
- (3) フランス革命期の貴族であり、小説家。サドの作品は暴力的なポルノグラフィーを含み、徹底した無神論、キリスト教の権威を超越した思想を描いた。

コメントの追加 [d11]: フォント 14

コメントの追加 [d12]: 半角0、半角数字、半角スペース

引証資料

Ginsberg, Allen. *Howl and Other Poems*. City Lights, 1959.

Murphy, Patrick D. *A Place of Wayfaring: The Poetry and Prose of Gary Snyder*.

Oregon State UP, 2000.

Snyder, Gary. *Riprap and Cold Mountain Poems*. Counterpoint, 2009.

國領英雄、「米国戦時標準船 T2 型タンカー」、『海事資料館研究年報』、第 21 号、1993 年、14-20 頁、『Kobe University Repository: Kernel』、www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/81005666.pdf。

三浦徳弘、『ロビンソン・ジェファーズ詩集』、国文社、1986 年。

コメントの追加 [d13]: 引証資料の書き方は HP の MLA 参照

コメントの追加 [d14]: University Press は UP と省略

コメントの追加 [D15]: http:// は削除する。